２０．Ｃ－０６

ナラティブスロープを使用した語り手の感情

作業療法士学科昼間部

【背景】

実習を振り返り我々は対象者とコミュニケーションをとることが難しいと感じた.

大宮ら[1]はコミュニケーションは語り（ナラティブ）を引き出す鍵になり, 岡村ら[2]は自己開示はラポール形成に繋がると述べている. また小砂ら[3]はナラティブスロープを用い視覚的に確認することがより深い語りを引き出せたと述べている．これらのことから語りを終えた対象者の感情の傾向を知ることは，ラポールの形成に役立つと考えた．そこでナラティブスロープを用いプラス面とマイナス面を話した時の感情の違いを明らかにする.

【対象および方法】

大阪医療福祉専門学校に在籍する 20 代前後の学生 20 名（女性 12 名，男性 8 名）を無作為に各 10 名ずつプラス群とマイナス群に分け，ナラティブスロープを実施しどのような感情を抱いたのかを伺う．その後，語り終えた時の感情を気分調査票に記載し，５因子に分類する．また自由記述の欄を設けた．検定方法はマンホイットニーの U 検定を用い 2 群を比較する．倫理的配慮として研究の目的・方法を説明し参加の任意性や個人情報保護などの同意書を作成し署名を求めた.

【結果】

マンホイットニーの U 検定を用い 2 群を比較した結果,差は認められなかった．しかし平均値を比較した結果,両群ともに「爽快感」が最も高く，平均値 15.67[4]に対しプラス群 19.4, マイナス群 21.5 であった(図 1). また，自由記述としてプラス群では「楽しかった」マイナス群では「すっきりした」という回答が多く見られた.

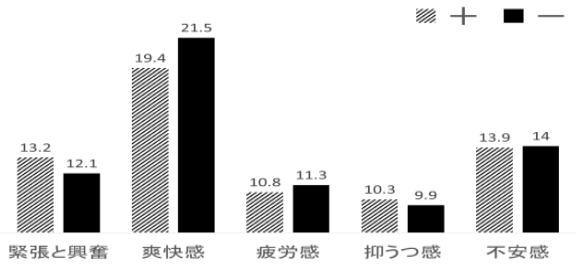

図 1 プラス群マイナス群の平均値の比較

【考察】

ナラティブスロープを用い，プラス群・マイナス群の 5 因子の差は見られないことから，気分の差はないと考えられた．また，ナラティブスロープを用い視覚的に確認しながらコミュニケーションをとったことでより深い語りを引き出せ[1]， 爽快感にも繋がったと考える．このことから，ナラティブスロープを用いて相手の語りを引き出し、語りを傾聴することが必要であると考える.

【まとめ】

プラス面・マイナス面を話した時の感情の違いを明らかにするためにナラティブスロープを用い，気分調査票を実施した．プラス群・マイナス群に差はみられなかったが, 両群ともに爽快感が高いことが分かった. これらのことから，相手の語りを引き出したことが，爽快感に繋がり，ラポールの形成に役立つと考える.

【文献】

1) 大宮朋子，瀬戸山陽子・他：Health Literacy 健康を決める力 2.「信頼できる情報」とは何か（internet)：http://www.healthliteracy.jp/shinrai/
2) 岡村直樹：クリスチャンユースのラポール形成に関する質的研究．キリストと世界，東京基督教大学紀要．22, 2012，78-104.
3) 小砂哲太郎，水野健・他：アルコール依存症の再入院患者が抱える“生きづらさ”に焦点をあてて－作業遂行歴面接第 2 版を用いて－．日本作業療法学会抄録集(CD-ROM) 2017.